

星 昭  
 (信州大学教授)

アフリカ諸国の政治体制はこれまで概ね一党制をとってきており、形式的に複数政党をもつ国でも事実上一党支配であることが多かった。そのアフリカ諸国にも近年多党制化の波が押し寄せてきたことは周知の通りである。その場合、アフリカの社会主義国が東欧諸国の脱ソ連化と多党制化に呼応して政治的複数主義への道を進んだのは自然の成り行きといえようが、非社会主義国までがいわば時流に乗る形で遅ればせながら多党制化の動きを見せているのは皮肉な現象に思える。

しかし、アフリカにおけるこうした多党制への移行は現実には必ずしもスムーズにいったいなく、例えばジンバブエなどは逆に一党制化を狙っていると聞く。つまり、多党制化は経済政策の有効な実施を妨げ、部族対立を再び顕在化させてしまうというのだ。しかし、それだけなのだろうか？

そこで想起されるのはミシェル・フーコーの「パストラル権力」という概念である。これは要するに非西欧社会に特有な、「土地にでなく、人間群に対して行使される権力」を意味するが、さらに政党制との関連で敷衍すれば次の様になる。すなわち、領土を国家主権の主要な存立基盤として社会分化に伴う住民の多様な経済的利害を調整せねばならぬところでは、経済的複数主義も合目的なものであり得るけれども、領土を超える宇宙論的観念に支配された住民が「ものの累積よりひとの循環を重んじ」て社会的成層化を進展させなかつたところでは、それがむしろ破壊的に作用する、というのである。彼のいう「権力関係」は屢々抑圧的なものと定位される「国家」概念より明らかに広義であり、特にこの「パストラル権力」は、住民を導き、見守り、救うものとして、肯定的なニュアンスで捉えられている。第2次大戦後「国境不変更の原則」の下で現代化を強いられたアフリカ諸国になお「パストラル権力」社会の母斑を見出すのはわたしの僻目であろうか。